

文化交流としての海賊版

日韓漫画における表現の共有

BOOTLEG AS THE CULTURAL EXCHANGE Joint ownership of the expression in Manga and Manhwa

大塚 英志 先端芸術学部まんが表現学科 教授
齊木 崇人 大学院芸術工学研究科 教授
泉 政文 先端芸術学部まんが表現学科 助手
尹 性喆 大学院芸術工学研究科 博士後期課程

Eiji OHTSUKA Department of Manga Media, School of Progressive Arts, Professor
Takahito SAIKI Graduate School of Arts and Design, Professor
Masafumi IZUMI Department of Manga Media, School of Progressive Arts, Assistant
Seongcheol YUN The Art and Design Division (Doctoral Degree Course), Graduate School of Arts and Design

要旨

いわゆる「海賊版」は、常に知的所有権侵害の問題としてのみ今日、問題化されるが、そもそも日本の漫画表現の形式性は1930年代のディズニー・アニメーションの海賊版漫画表現を介して、ハリウッド産アニメーションのキャラクター作画様式、すなわち「ミッキーの書式」を受容することで成立した。これら海賊版は原著作を印刷によって違法コピーするのではなく原著作に対し模写・翻案・キャラクターの借用を行なうものである。韓国・台湾でも十五年戦争終結以降、日本漫画のこのような模写・翻案型海賊版が刊行されることで、漫画表現の形式や方法が移動する現象が見られる。

本報告では「ミッキーの書式」が、韓国・台湾の二地域においてどのように受容されたかについて調査をもとに概観する。韓国においては、日本と同時期の1930年代にディズニーの模写・翻案型海賊版は確認できるが、原則として日本を介してのディズニー流入にとどまり、海賊版による書式の変化は起きていない。他方、台湾では、1960年代に日本漫画の海賊版と混在する形で、ディズニー及びアメリカン・コミックの模写型海賊版の存在が確認できた。日・韓・台の三地域のディズニー及び「ミッキーの書式」の受容については、今後も調査研究を続ける。

Summary

In these days, commonly called a “Pirated Edition” is caused problems of infringing intellectual property rights. However, originally the conventions of the Japanese cartoons expressions were affected by the Disney animation’s pirated edition expressions in 1930s and were accepted the Hollywood animation’s styles of painting, that is, “Mickey’s Form”. After finishing the 15 years war in Japan, South Korean and Taiwanese pirated editions which are imitated or adapted like the Japanese pirated editions were published. Therefore, the cartoons’ expression and the method of drawing were changed.

This report examines how “Mickey’s Form” is accepted in South Korea and Taiwan. In 1930s, at the same time in Japan, we could identify Korean’s pirated editions which imitated and adapted Disney’s cartoons. However, the Korean’s pirated editions just imitated and adapted the Disney cartoons, so the form of Korean cartoons were not changed by Disney’s pirated editions. Meanwhile, we verified imitative Taiwanese pirated editions which were mixed Japanese pirated edition, Disney’s cartoons and American cartoons existed in Taiwan in 1960s.

1) 十五年戦時下の日本漫画事情

日本の漫画表現が近代的かつ西欧的な新しい形態へ「更新」され、成立するには、十五年戦争期間が転換点として重要な意味を持っている。

日本の漫画表現は1920年代のモダニズムやそこで大衆化したアヴァンギャルド芸術運動の反映としてまず成立し、1930年代から1940年代前半、満州事変から太平洋戦争の終結に至る15年間の戦争の時代におけるファシズム体制のもとで、「ロシアアヴァンギャルドとディズニーの野合」⁽¹⁾とでもいうべき事態の中で一つの体系からなる方法として確立した。そこでは日本の漫画表現は伝統から切断された上に、戦争の主たる相手国であるアメリカの資本主義システムが産み落としたディズニーアニメーションの方法と美学をその国の社会主義思想を徹底して弾圧する必要があったソビエトロシアが産み落としたロシアアヴァンギャルド的解釈とエイゼンシュテインの如き方法をもって、論理的かつ実践を伴う形で統合したプロセスがはっきりと確認できる。

2) 日本統治下の韓国漫画事情

一方、1908年から1945年までは韓国の近代漫画の出発点であり、「導入期」と呼ばれている。当時の韓国は日本から統治されていた植民地でありながら、儒教的な伝統文化社会からヨーロッパやアメリカの近代文化社会へ、近代化していく過渡期であった。

日本統治下で国権を失われていた状況下、開化派の知識人たちは外国の近代文化を受け入れようとした。中でも、外国へ渡り、近代文化を直接経験して身につけ、韓国に帰ってきて近代文化を伝えた知識人たちも少なくないが、彼らの中には映画や漫画など、海外の大衆文化に深い関心を持っている人たちがいた。そして当時の韓国では未知の大衆文化としてあった「漫画」が流入し、出版物に漫画が登場するようになる。韓国で「漫画」という言語は、1919年『毎日申報』に日本漫画「三角漫画」が連載された以降、金東成(キム・ドンソン)の「時節漫画」が登場してから本格的に使われ始めたという⁽²⁾。その前には、「挿絵」「ダウンウォッチ」「ブオンチ」「鐵筆寫眞」

などで呼ばれていたのである。「漫画」とは異なる呼称であったが、現在の新聞に載せられている一コマや四コマ漫画と全く同じ形式である。こういう新しい大衆媒体を通じて、当時の知識人たちは民衆たちを啓蒙しようとしたのである。漫画が大衆化したアヴァンギャルド運動による下からの近代化であるのに対し韓国では知識人による大衆啓蒙の手段であった。

3) 日本漫画におけるディズニーの受容

1930年代の日本では、「漫画大会」と題して短編アニメーションを数本まとめて上映する興行形態が普及することで、アメリカ産トーキー・アニメーションは一挙にその市場を拡大するようになる。こういったアメリカ製アニメーションの大量流入と戦時下の文化映画製作や科学啓蒙政策の影響により、日本のアニメーション及び漫画における「遠近法」を含む「三次元」的な空間構成が成立し、1930年代にはディズニースタイルの作画法を構成主義的に受容した「ミッキーの書式」に基づく大量の日本の国産キャラクターが成立することになる。

具体的には田河水泡「のらくろ」(1931～)、島田啓三「冒険ダン吉」(1933～)に登場するネズミの「カリ公」に始まり、吉本三平「コグマノコロスケ」(1935～)、大城のぼる「しろちび水兵」(1933)など、「ミッキーの書式」による主人公もしくはサブキャラクターを持つ作品が1930年代にほぼ出揃う⁽³⁾。これらのキャラクターはそのまま十五年戦争下の代表的な漫画作品と一致する。

一方ではミッキー・マウスの海賊版として、廣瀬しん平『ミッキー忠助』(図1)と謝花凡太郎『ミッキーの活躍』(図2)などが刊行された。これらはミッキー・マウスの



図1) 廣瀬しん平『ミッキー忠助』春陽社、1934(左)

図2) 謝花凡太郎『ミッキーの活躍』中村書店、1934(右)

キャラクターを無許可で用いた日本人漫画による創作物

であり、これらの二次創作的海賊版もまた「ミッキーの書式」の拡大の要因となった。

「ミッキー忠助」は、日本の黒ネズミがミッキー・マウスの人気を嫉妬し、彼になりすますべく、ミッキーのハリボテを製作、ミッキーになりすます、というもので、「ミッキーの書式」を急速に受容した日本漫画の在り方を象徴的に表現している(図1)。日本の漫画キャラクターはいわばミッキーを「装う」ことで成立したといえる。また「ミッキーの活躍」では冒頭で、ミッキーたちの一座を港で迎えるシーンが描かれているのも象徴的である(図2)。ここに描かれたキャラクターは当時の中村書店から出版されていた主要作品のキャラクターたちで、中には明らかにミッキーを白黒反転しただけのキャラクターが見えるが、これは大城のぼろの「しろちび水兵」である。

このように「書式」の拡大と模写型海賊版によって日本漫画は確信犯的に「ミッキーの書式」を受容した。

十五年戦争後、手塚治虫はこの書式を継承するとともに改めてディズニーを再受容し、戦後まんがのキャラクター書式を確立した。日本漫画の起源には海賊版が重要な役割を果たしたのである。

4) 韓国漫画におけるディズニーの受容

それでは韓国におけるミッキー・マウスの海賊版と近代漫画の成立は関係しているのか。

韓国におけるディズニーの受容について、歴史的観点と結び付けると大きく二つの時期に区分できる。日本統治下で日本を通じてディズニーを経験した1930年代から1950年代前までを「間接的受容期」、朝鮮戦争後からソウル・オリンピック開催までの1950年代から1990年代前までを「直接的受容期」と区分付けることができる。

ディズニーの間接的受容期の韓国漫画は、ヨーロッパとアメリカ、そして日本から直接・間接的に影響を受けながら発展してきた。当時の新聞・雑誌に載せられている漫画には、西洋的キャラクターが登場し、他方では日本の漫画形式を採用していたことが確認できる。そういった漫画を描いた作家たちの中には日本を含んだ海外留学のキャリアを持った、いわゆる留学派作家たちが少な

くなく確認できる⁽⁴⁾。

しかし韓国にディズニー漫画・映画が公式的に輸入されたのは1950年代前半からであり、ディズニー記録映画「砂漠は生きている」(1956)を始め、「白雪姫」(1956)、「ピーターパン」(1957)、「シンデレラ」(1962)、「ピノキオ」(1963)が続々輸入され、映画館で上映した⁽⁵⁾。

ディズニーの間接的受容期から直接的受容期がはじまる前まで、韓国でディズニー漫画やミッキー・マウスが登場していた記録は確認できないが、映画評論家今村太平はアニメーションのプロパガンダ手段としての有効性を説いた論文の中で「支那はむろん東亞共栄圏すべての大都市において、アメリカ漫画がつい最近まで最大の人気を以て上映されてみたといふ事実を忘れてはならぬ。>>⁽⁶⁾と述べており、1940年代前後に、「共栄圏」内である韓国でディズニー漫画映画が上映されていたと推定できる。

ディズニーの間接的受容期には、当時の漫画や小説の挿し絵に「ミッキー・マウス」の模倣作が登場するようになる。韓国で初めてミッキーが描かれたのは1933年に発行された時事雑誌『新東亞』に掲載された崔永秀(チェ・ヨンス)の記事「トーキー漫画になるまで」(図3)の挿絵である。

「トーキー漫画になるまで」は、当時のトーキーアニメやトーキーアニメの制作過程についての紹介記事であり、ディズニーへの関心とその制作方法にまで早い段階で韓国に及んでいたことがわかる⁽⁷⁾。「トーキー漫画になるまで」にミッキーが登場した直後には朴泰遠(パク・テウォン)という小説家が自ら描く挿し絵にミッキーが登場する。当時の日刊紙『東亞日報』(1933.7.16)の連載小説「半年間9編：心配ない男」に、内容とはまったく関係がなしにミッキーが描かれた。2年後の1935年、挿絵ではない4コマ漫画の主人公としてミッキーが登場した。当時の日刊紙『朝鮮日報』(1935.10.3)に掲載されていた金湘旭(キム・サンウク)の4コマ漫画「ドルボとミッキー」(図4)がそれである。

「ドルボとミッキー」は、少年ドルボとともにミッキーが主人公として登場し、物語をつくっていく。この漫画

は外国の漫画キャラクターをそのまま模倣した、韓国初のミッキーを借用した海賊版として考えられる。しかし韓国では同時期に崔永秀が岡本一平の「漫画漫文」形式を韓国にもたらし、むしろその影響の方が大きかった。その結果日本ではディズニー形式の「のらくろ」などに押された「漫画漫文」が韓国では優位であったと思われる。

5) 台湾漫画におけるディズニーの受容

日本統治下で間接的にディズニー漫画を受容した韓国の事例と同様に、アジア圏であり、同時期に日本統治下におかれていた台湾ではどのようにディズニー漫画を受容したのかについては台湾・台北市で現地調査(2010年11月25日～29日)を行なった。主に古書店と図書館、そして日本の秋葉原に相当する光華商場で、調査・資料収集を行なった。

その結果、日本と韓国がディズニー漫画を受容していた時期の海賊版は確認できなかった。台北市が運営している「中崙図書館」には、1960年代から1990年代まで出版された日本漫画の海賊版が所蔵されているが1960年代から1970年代まで出版された刊行物において「フィリックス」「ボックス・バニー」「ダフィー・ダック」などのアメリカの漫画キャラクターが模倣型海賊版に登場していたことを確認した。また、ミッキー・マウスと手塚治虫「鉄腕アトム」をミックスした模倣キャラクターが多数存在したことは興味深い。(図5)両キャラクターは模倣型海賊版の作者に同一の「書式」とみなされていたことがうかがえる。尚、台湾で入手した1970年代の海賊版638点の書誌データのデータベース化を行なった。

6) まとめ

このように日韓両国はディズニーを受容していく過程のなかで、ディズニーの代表的キャラクター「ミッキー・マウス」を海賊版として引用及び模倣した。しかし、日本はキャラクターを借用する水準にとどまらず、「ミッキーの書式」を受容し、戦後日本漫画のアイデンティティ成立の基礎をつくった。一方韓国は、日本統治下でディズニー漫画はリアルタイムで流入しながら、日本に比し海賊版的

引用は極めて少ない。むしろミッキーの登場とともに流入された岡本一平の「漫画漫文」式の新ジャンルが流行し、ディズニーの受容はキャラクターを借用する水準でとどまってしまった。そのことが日韓の漫画の「書式」にどのような影響を与えたかは今後の課題である。



図3) 崔永秀「トーカー漫画になるまで」『新東亜』1933



図4) 金湘旭「ドルボとミッキー」『朝鮮日報』1935



図5) 施並志(施並致編)『金剛王子-VOL3』義明出版、1970

【註】

- 1) 大塚英志、「『桃太郎 海の神兵』とは何か—日本ファシズム体制におけるディズニーとエイゼンシュテインの野合」、国際シンポジウム「テキスト・映像・欲望—多国民間大衆文化の表象」基調講演、国立政治大学、2010.11.27
- 2) キム・ジョンオク、「韓国近代漫画の特徴に関する研究」、祥明大学校大学院、2006、p54
- 3) 大塚英志、「『ミッキーの書式』から『アトム』の命題へ」、神戸芸術工科大学大学院、2007、p40
- 4) 孫相翼、「韓国漫画通史(上)」、シゴン社、1996、p131,150,187,206, pp244-245
- 5) イ・キョンスク、「韓国におけるディズニー受容過程に関する研究」、高麗大学校大学院、1999、p116
- 6) 今村太平、『戦争と映画』、第一芸文社、1942、p61
- 7) 4)と同じ、p188